

柏木教授の教育賞の受賞について

2011.03.08 海友フォーラム 岡本 洋

1. 初めに

柏木教授は昨年（平成 22 年）12 月 20 日に大阪大学地球 3 学科の教育賞を受賞された。その時同席していたのだが、当日は 2010 年大阪大学「地球総合工学シンポジウム - 問われるデザイン、応える教育」と題する催しで、外部講師 3 人の一人として出席していたからだった。授賞式はこのシンポジウムに引き続いて行われた。シンポジウムの内容には大学教育の内容とか活性化の問題も当然含まれていることから、教育賞はシンポジウムの延長線上にあるし、大学としてのこの様な取り組み努力を知るの新しい発見だった。

受賞者は複数であったが、最初の受賞者である柏木教授のスピーチは特に共感深いものであった。そこで後日お願いして、頂いたのが別添の投稿である。当日のスピーチを更に補足されていて先生の教育、講義、学生との接し方への熱い思いが伝わってくる。

2. 柏木教授と教育賞

2.1 先生の専門は所謂、水関係で主として波浪中の抵抗推進、運動とされている。世代の違いで直接の仕事をしたことはなかったが同じように水槽委員会にも属していたし、神戸商船大学の松木先生の所に居られた時から知っている仲でもある。その後、九大応用力学研究所を経て阪大に戻ってこられたのは 2008 年との事で、阪大でのキャリアは比較的新しいようである。

<http://www.naoe.eng.osaka-u.ac.jp/kashi/kashi.html>

<http://www.naoe.eng.osaka-u.ac.jp/naoe/naoe1/research.html> 参照

先生の報告には、学部 4 年生への「流力弾性学」の講義に対する先生の取り組みが中心に述べられている。卒業時の学生の投票がダントツに高得点だったとのことだが、略全員の学生がこの難解な講座を選択しての結果だから価値ある成果には間違いない。色々な手立ての工夫と先生自身の努力がその文章から伝わってくる。英国教育学者ワードの言葉を引用して、「教えて、考えさせて、やる気に火をつける」のを目指すとしている熱い思いが伝わって非常に好ましく頼もしく大いに共感を呼ぶ。

2.2 私は当日のシンポジウムの講演の中で、大学教育の活性化に関して一つの挿話を引用した。それは昨年 2010 年ノーベル賞(化学)を受賞した根岸栄一教授の次ぎの言葉である。

『留学したペンシルバニア大学は 授業が非常に充実していた。東大と同じ教科書を使っていたが、日本とは月とスッポン。ブラウン先生は実験の方法を細かい所まで指導してくれて有難かった。野球でも音楽でも、トップレベルのプロを育てるためには、一対一でびしびし指導を受けないといけない。』

(日経 H22.11.28)

問題は教師の志と手法にあるということだろう。上掲のワードの言葉と、根岸教授の言葉は同じ事をいっているように思われる。教科書が同じでも教師の指導・取り組み方次第で成果が全く雲泥の差となる実例がここにある。古くから多くの事例が語られている。松下村塾の例を引くまでもなく、決め手は教師そのものにある、ということだと思う。講演会で私は「大学の先生もこの様に努力してほしい」との思いを込めてのことであったが、柏木先生には言わずもがな、であったと反省させられた次第だった。

2.3 阪大造船学生の感想も聞いてみたいと思っていたところ、丁度この講義評価に加わった筈の昨年春(平成 22 年 4 月)卒・入社の新入りが川重・神戸造船にすることが判り面談の機会をえた。彼女が勿論

柏木先生の「流力弾性学」を受講しているのは予想されたが、なんと卒業研究も先生についた6人のひとりだった事、テーマは、「波浪中船体運動方程式における流体力と運動の整合性に関する研究」と言うものだったのは良しとしても、本人が女性だったのは意外だったし、配属先が本人の希望どおり工作部の艦装だというには時代の変化とは言え更に意外だった。彼女の話から、講義における先生の工夫や努力は相当のものだったことが納得できた。「流力弾性学」の講義においては、前年の関連講義の補習をおこなって理解度を容易にするなどの余分の作業などもやられたらしい。その他クイズ、テスト、宿題などの工夫・努力でうまく載せられたと笑っていた。ダントツ評価点も成程と感じた。

3 . Faculty Development, FD 大学教育活性化

3.1 文部科学省方針 - 先生の報告にでてくるこの FD という言葉をしらなかったこともあり、以下に簡単な紹介を書き加えることにする。最近、FD が各大学に取り入れられているのは、文部科学省の方針によるものらしい。

FD は大学教員の教育能力を高めるための実施的方法であり、大学の授業改革のための組織的な取り組みの方法をさす。我が国では規制緩和の流れによって大学設置の自由度は増したが、一方でその弊害としての質の低下除去のために文部科学省(文科省)は、大学設置後の外部評価を高める様に方針を転換した。『大学教育の事後評価では、シラバス*(教育内容など。後述)の整備、授業評価システム、教員の研究成果報告に加えて FD への取り組みが評価されることになった。このために、各大学はこぞって FD センターなどを設置して、教員の情報交換を開始している』。『法律的には平成 18 年の「大学院設置基準一部改正」により平成 19 年度に大学院から導入の義務付。同様に、大学・短期大学・高等専門学校については平成 20 年度に導入した』。この様に組織的な動きは最近のことである。

阪大の組織としての動きは少なくともこの文科省の動きと関係有るのであろう。

3.2 米国事情 - 最近亡くなられた江田先生から、教授として在職されていた米国スティヴンス工大の講義に対する学生評価制度について何度も聞かされた事がある。米国では学生の講義に対する評価は、教授にとっては非常に重大な意味を持つ。受講の学生評価が低いと次年度受講する学生も集まらず、結果的には職を失うことに繋がらさえる。したがって、学生の評価を高めるための講義内容、プレゼンテーション手法、理解度向上のための工夫が必要となるが、それと同等以上に外部プロゼクト獲得額などによる社会的評価も又大変重要な要素で、日ごろから相当の努力をしていることを強く感じたものである。

米国の大学では、学部ごと、業績の高い教員ごとに「成果主義」に基づいた報酬体系が確立されている。その判定の一部は勿論学生の講義評価なのであろう。学外からの教員も多いためもあるらしいが講義詳細な内容、教員自身への連絡方法など学生が、大学・学部・教授を選ぶための資料、教授の評価などが詳細に記された印刷物(シラバス)が公開されている徹底振りとのことである。

大学も国際化の時代であり、「大学の世界ランキング」が新聞にも頻りに登場する時代である。東大ですら香港大学の後塵を拝するというのはどうも納得いかないのだが FD もその対策の一つなので日本の大学も頑張らしてほしい。

4 . むすび

柏木先生の報告内容からは教育にかける強い思いが伝わってくる。先生の努力が成果をあげて一人でも多くの立派な後継者が生まれることを期待したい。

以上